日蓮宗　常栄山　本照寺だより

第37号
厚木市下古沢133
TEL・046-247-1156
FAX・046-247-1156
振替・0230-7-35749
（加入者名・本照寺）
発行所
本照寺・須藤教裕

お会式

今年は10月16日（土）

日蓮聖人のご命日　10月13日

【法要】午後2時から日蓮大聖人第727遠忌法要を執り行います。法要後は適宜ビデオ放映等

【お稚児さん】4歳から10歳くらいまで。ご希望の方はご連絡ください

【第一回諷誦文】午後4時半から。500円

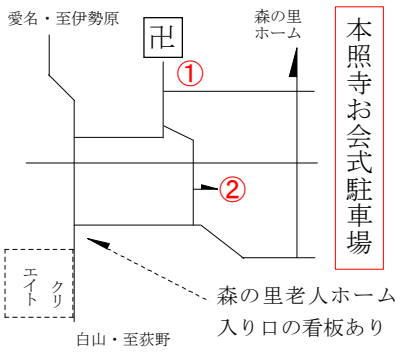
【万灯奉納・予定】

一、中分・午後7時出発～7時15分頃到着

一、有志・中分に続いて

一、立正佼成会・午後7時20分出発～8時10分到着

日蓮聖人の左手とつながっている赤い帯。これに触れることによって日蓮聖人と間接的な触れあいができます



本照寺お会式駐車場

露天商12軒と共にお楽しみください・駐車場は上図・第①と第②を予定（①は本照寺坂下駐車場。②は例年と同じく特設駐車場となります。

【第2回諷誦文】万灯奉納後。

一泊お山しゅぎょう

■55人の参加者を迎えるため、前日から準備作業に入る。一輪車に乗せた七輪10個、薪（たきぎ）、イスなどを坂下の物置から幾度となく上に運ぶ。ハアハア…息が切れる…

■7月26日午前9時、いよいよ集合。天気は上々だが、「空よ、2日間、もってくれ！」と、思わず天を仰ぐ。

午前の行事もあっという間に終え、昼食後はコマ図を見ながらのウォークラリー。

1班から10班まで、数分ごとに階段を下り、地図の道を左へと進む。地図途中には10の問題があり、100点満点を10班で競う。

■（戻って）テント張り～夕食準備～温泉入浴（七沢温泉の七沢荘は、総勢65人でも楽々受け入れ可能で大助かり）～夕食～しゅぎょう～花火～紙芝居（本読み）～怖い話～肝だめし…しかし、カレーを食べ始めた時、にわかに暗雲と雷が…で、「本堂で食べるよ～！」

一同本堂へ入ってほどなく、ピカ、ゴロゴロ！！！　大雨と強風でしたが、3時間後の9時には就寝準備ができる状況となり、午後10時、就寝。…グウ、グウ…いやいや…全然寝ません…

第12回お山しゅぎょう～参加者55人と一緒に

『我々はどこから来たのか　我々は何か　我々はどこへ行くのか』

横3メートル75センチ・縦1メートル40センチの大作～ゴーギャン

■この絵画はフランス人画家ゴーギャンの作品として有名なもの。晩年、植民地・タヒチにて過ごしつつ制作を重ね、裸婦像の絵画を多く残しています。この作品は彼の代表作であり、その題名は、『我々はどこから来たのか　我々は何（者）か　我々はどこへ行くのか』…この作品の発するメッセージは何なのか…ゴーギャン自身はそれについて明確な説明を残していませんが、絵画右側の赤ん坊から左側の老人を見渡すと、まさに『どこから来てどこへ行くのか』を描き、また「我々は何か」との深い問いかけをしてきます。

ポール・ゴーギャン・1903年（明治36年）55歳で死去

心臓発作

■私たちは『どこから来てどこへ行き、そしてその存在意味は？』といった問いかけはせず、毎日を「平気」で過ごしています（実にありがたいことです）。

では「我々は何か」…この重い問いかけにあなたは何と答えますか？

おはなし

■「クツをそろえよう！それは自分のため、そして人のため」「（コンビニで）お金があるから買えるって、実は違うんだよ～！」といった『関わりの中での自分』といったことや、「命に対しての『いただきます、ごちそうさま』でもあるんだよ～！　だから、いただいた命が、人が、喜んでくれることをしようね～！いただいた命が、人が悲しむようなことをしちゃいけないよ～！」といったことを話すのですが、はたしてどこまで伝わるのか？　毎年思うこと…。ですが2日間、私も「班の先生」を務め、みんなから「おしょうにん！」と、それこそ何百回となく言われると、やはり皆、かわいくなるもの。

■そんな中での今年、「親への手紙」でこんなことが…

「おしょうにん！　手紙できたよ！　住所はここへ書けばいいの？」と、封筒を差し出すA君。しかし、書かれた父親の名字が違います。**「あれ？　お父さんの名前…」「…うん、離婚したんだ…」**

■「来年も来るんだよ～！待ってるからね～！」

閉校式後に本堂前で、解散の皆に幾度となく同じ言葉を掛ける。そんな言葉を掛けながら、「A君、新しいお父さんと仲良くできるといいな」と、願わずにはいられない…

テントを背にカレー作り。完成して余裕かな？

気になる木　3

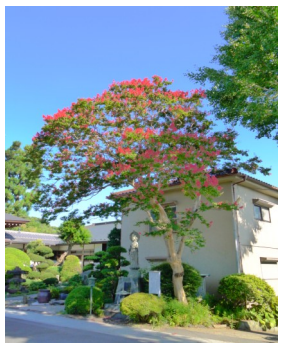
■サルスベリは中国南部原産のミソハギ科の落葉中高木。

開花は8月頃で、長く紅の花を咲かせるので百日紅（ひゃくじつこう）ともいう。

サルスベリの名は幹（みき）の肥大成長に伴って古い樹皮のコルク層がはがれ落ち、新しいすべすべした感触の樹皮が表面に現れて、猿が登ろうとしても滑ってしまうから（実際には簡単に登ってしまう）。

■江戸時代に日本に入り、日本に野生するヒメシャラ、ナツツバキ、リョウブなども樹皮が似ているのでサルスベリと呼ばれる。

■樹齢は200年ほど？また結構背が高いのでその存在に気付かない人もチラホラ？



「子どもは大人の言うことを聞くのは苦手だが、大人の真似にかけては天才である」ボールドウィン（英）

私たちのお寺は

宗　派・日蓮宗
ご本尊・大曼陀羅【だいまんだら】
ご本仏・久遠実成本師釈迦牟尼仏【くおんじつじょうほんししゃかむにぶつ】
総本山・身延山久遠寺【みのぶさんくおんじ】
宗　祖・日蓮大聖人
経　典・法華経
主に唱えるもの・開経偈～方便品～自我偈～お題目～宝塔偈

「本照寺」のホームページは「厚木本照寺」や「046-247-1156」で検索してください。
この「本照寺だより」が届かない家はお檀家登録がされていません。
墓地があっても「本照寺だより」が届かない方はお知らせください。

ホッとできるお寺だからこそ！
―自死志願者駆け込み寺から―

千葉県長寿院住職
NPO法人自殺防止ネットワーク風　代表　篠原鋭一

私に自殺決行の勇気を

■毎日10数通の手紙やハガキをいただきますが、その多くは自死を見つめて苦悩する思いが綴られており、どのように返信すれば良いのか考え込まずにはおられません。

とりわけ住所も名前も記されていない便りは手の打ちようがなく、窓の外に目をやり溜め息を吐き出すばかり。

例えば…

「私、28歳の独身女性です。生きていくことに疲れました。どの方法がいちばんいいか考えている毎日です。なすすべもない、耐える気持ちも消失、目が覚めることの恐怖、眠れないことも恐怖。住職さん、自殺を決行する勇気をください」

色褪せたハガキの短い文面から、その苦悩が伝わってきますが、住所も名前も不明。『一言の電話が欲しい。その苦悩を分けてよ！』と願うばかりです。

めすらしく雪が舞った日の深夜のことです。途切れ途切れに電話が鳴りました。幾度目かに受話器を取るとお年寄りの声。おばあさんが小さな声で告げました。

私…捨てられたんです

■「住職さん、失敗しました…やっとのこと椅子さ登って鴨居に紐掛けて首に巻きかけたら切れてしまってのう…失敗しました。住職さん、もっと強い紐、持って来てくれませんか？　お願いします…」

思わず答えます。

「おばあちゃん。死ぬためのお手伝いはできませんよ。生きていくためのお手伝いをさせてください。ひとりで苦しまないで！　会いに行きますからね…」

やがて涙声でおばあちゃんが語り続けました。

「わたしは77歳になります。3人の娘と2人の男の子がいて、それぞれ家庭を持ち独立しているのですが、この4年間、一度も会いに来てくれません。住職さん、信じてもらえますか？　4年間も音信不通です。電話しても「その内行く」の一言。手紙を出しても返事はこない…住職さん、**私、捨てられたんですよ。**捨てられた人間は死ぬしかありません…」

数日後、おばあちゃんを訪ねて語り合いましたが、その時、恥ずかしげに手渡された一枚の便せんに短歌が2つ…。

「来るはずの無い子どもと知りつつも　車の音に玄関に駆け」
「命なる　子どもらとの仲引裂かれ　喜寿も悲しい　ひとり居て泣く」

毎日100人近くが自死をする　この国　日本

育ての祖母の死

■日曜日の午後です。境内に目をやると、オートバイを止めて、石段に座り込んでいる青年の姿が見えました。

「おーい、どうした。上がってらっしゃい！」

うつむいたまま26歳になったばかりだと告げるK青年。お茶を勧めながら顔をのぞくと、大粒の涙を流しています。こんな時にかける一言「よーく、きたね。お茶飲んで、ゆっくり話せばいいよ…」

相手が語り始めるのをひたすら待つのです。

「オレを育ててくれたばあちゃんが死にました…。とうとうオレ、ひとりになった。これからオレを捨てた親を殺して、死にます。ダチもいねえし、仕事もクビになった。住職さん死ぬ前に、ばあちゃんの供養して死にてえからお経読んでください。これでいいっすか？」

K青年が千円札一枚を目の前におきました。K君の両親は、披が小学校2年生の時、離婚。地元の高校を卒業するまでおばあちゃんに育てられたのでした。そして陸上自衛隊に入ったものの2年間で除隊。その後は幾つもの仕事を転々とし、やがてローンで買ったオートバイに乗って暴走の日々。幼い頃から心の奥に重く居座っていた両親への憎しみと怒り。それは度々おばあちゃんにぶつけられましたが、たった一人の理解者だった『ばあちゃん』の死は大きなショックで、自殺を考えるほどに彼を孤立に追いつめたのでした。

希望通り読経を終えると彼が大声で泣きました。

「ばあちゃん、ごめんな！苦労かけたのに何にもしてやれん！　ばあちゃん！」

…今、K青年はあこがれの熱帯魚店に就職して、一心に水槽を洗っています。

所詮　他人事

■平成7年頃から自死を見つめる人たちとの対話活動を続けていますが、時々、次のような電話や手紙が参ります。

「死ねば楽になるなら死なせてあげたらどうですか？防止なんて無駄なことです！」

ある時、70代の男性が**「死にたい奴は死なせろ！」**と激しく訴えてきましたから問い返しました。

「あなたお孫さんがいらっしゃる？　高校一年生ですか…じゃあお孫さんが『おじいちゃん、ボク生きてることが苦しくなったから死ぬよ』と告げたら『あぁ、楽になるなら死んだ方がいい』と自死を勧めますか？」

すぐさま男性が答えました。

「止めるに決ってんじゃねえか！」

つまり、他人の自死はどうでもいい。身内の自死は見捨てられるわけがないということなのです。「自死」は他人事ではありません。私たちの連帯責任において訪止しなければならないのです。

自殺対策に取り組む僧侶の会

『自死の問い・お坊さんとの往復書簡』

大切な人が自死で亡くなった
自殺したいほど辛い…
自殺未遂をしてしまったが
立ち直りたい…
自殺に思い悩んでいる人が
身近にいる…

自殺（自死）に関する相談・質問等を手紙（書簡）で受け付けます。あなたの“思い”を手紙に綴って届けてください。他人にとっては些細なことでも、あなたにとっては重大な問題です。

【手紙（書簡）の宛先】　〒108-0073
東京都港区三田4-8-20往復書簡事務局
※相談内容の秘密は守られます

編集後記など

■新緑5月、日帰り登山ツアーに参加しました（新宿駅午前7時半出発・富士山の外輪山、十二ケ岳・節刀ケ岳・鬼ケ岳の縦走）。参加者に65歳のご夫婦がいらして「毎週です。来週は大阪で登ります」と。聞けば奥さんが胃がんを切除して6年目。当初は近隣の公園などを歩いていたがいつしか山へ、となったとのこと。どうも雰囲気が他と違うので「やはり」と思った次第。一口に闘病といっても、病と向き合うその姿は一人ひとりに違いがあります…（お山しゅぎょうが終わりました。一口に疲労といっても…これ、登山より疲れます…）。■今年のお会式は立正佼成会も！皆さんお誘いあわせのうえ、どうぞお参りのほどを。開経偈の「見聞触知、皆菩提に近づく」ですから見て聞いて触れて知る。そう、これ無くして菩提には近づけませんよ～　実行、実践！